

一八世紀初頭薩隅方言における促音と撥音の音価について

江口, 泰生
岡山大学文学部助教授

<https://doi.org/10.15017/10367>

出版情報 : 文献探究. 34, pp.1-16, 1996-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :



一八世紀初頭薩隅方言における 促音と撥音の音価について

江口 泰生

§ 1 ロシア資料研究史外篇

ゴンザの事跡について言及した研究は、実は村山七郎以前から散見される。それらが学史の闇に埋もれてしまった理由を、ここで問い詰めるつもりはない。村山以前に注目すべき研究があった事実だけを指摘しておきたい。

早く『外交志稿』(1884)があったが、最も注目されるのは八杉貞利(1909b)である。日露戦争直後ながら、村山の研究に劣らない詳細な情報を記す。

- ①一七二九年に漂着し一七三一年に聖府へ送られこゝで露語を學び
- ②洗禮を受けて「ソザ」は「クジマ、シウレット」……「ゴンザ」は「デミヤン、ポモルツエフ」という姓名
- ③……その時「ソザ」は四十歳「ゴンザ」は十七歳
- ④食料として一人一日拾錢を與へられたこと
- ⑤樞密院の管轄から學士會院へ移されたこと
- ⑥各一日五錢づゝの棒給を増加されたこと
- ⑦彼等が日本語を忘れぬため兩人を一所に起臥せしめ之に監督をつけたこと
- ⑧學生にはやはり兵卒の子弟を命じ、その数は二人から五人であつたこと
- ⑨「ソザ」は一七三六年に歿しその後「ゴンザ」一人教師として年棒百圓を支給された
- ⑩「アンドレイ、ボグダノフ」(前出)が日本學校の主監として熱心其業に従事
- ⑪日本語の入門というやうのものを五冊即文典辭書會話などを編纂した
- ⑫これらは手書のみ、學士院會圖書館に保存されてゐる
- ⑬第一に出來たのは辭典で百〇四頁ほど、次は會話で七十頁、それから日本文典が三十八頁ある。その外に露和新辭典五も「アンドレイ」の筆に疑ひ無く、之は三百八十二頁の大冊、最後に又た露和會話の八十頁ほどのものがある
- ⑭これらは何れも一七三六年から三九年の間に編纂せられたもの
- ⑮「ゴンザ」は一七三九年十二月に歿

④⑥⑨について、同じ八杉の手になる『和露辭典』(1921,岩波書店)に次のようにある。

рубрь, る一ふる (=100копе`ек, 約一圓)……
копе`йка, こべつく, 哥(百分ノ一рубрь)

(2)

八杉貞利が100円・10銭などと訳したのは元々100ルーブル・10コペイカとあったものらしい。これは村山(1965)などの報告と一致しており、①②③⑤⑩⑪⑫⑭⑮と併せて八杉が確かな情報を得ていた事が分かる。

⑬で報告される「辞典」「会話」「日本文典」「露和新辞典」「露和会話」は『露日語彙集』・『日本語会話入門』・『簡略日本文法』・『新スラブ・日本語辞典』・『友好会話手本集』に相当するとみられるが、注目すべきは記述された頁数が良く一致している事である。更に興味深いのは、「「アンドレイ」の筆に疑ひ無」いとしている点で、(本文を誰が書いたにせよ)確かにボグダーノフの署名があるのは事実である⁽¹⁾。

この論文がゴンザの事跡について言及している事は、あまり注意されてこなかったようなのであえて一言する。

§ 2 ロシア人音写説の根拠

日本語をロシア文字に写すことを「音写」と呼ぶとすると、これらの資料の日本語を一体誰がロシア文字に音写したのか、資料の根幹に関わる重要な問題であろう。これには大きく分けて、日本人が写したとする日本人音写説とロシア人が写したとするロシア人音写説とがある。

村山七郎(1965)は「(ボグダーノフは)積極的な指導によってゴンザに幾つかの日本語参考書を書かせたのである。しかし、それらはゴンザひとりの労作でなくて、正しくはゴンザ——ボグダーノフの共同労作である」という。この「共同」がどのような形態であったのか、村山(1968)で次のように詳細に語る、「ロシア語の部はボグダーノフが、日本語の部はゴンザが書いたことは明らかである」と。

また高野明(1982)は「協力して作った簡易辞典や会話書、文法書などがあり……それらに記されているロシア語を分析することによって、これは九州の漂流民が聞きとった言葉であるとか、東北なまりの人が聞きとったものであるとかが分る」とする。

村山に対する反論は後述するとして、先ず高野の論拠を検証してみよう。確かにロシア語が書物によって微妙に異なっていることは事実である。しかし、これを日本人が書いたものだからという理由に還元することが可能だろうか。

ロシア資料にはそれぞれ原拠となった著作がある。『露日語彙集』はボルカルポフの“Краткое собрание имен по главизнам расположенное тремя диалектами”(『小辞典』)を見出し語として採用、『日本語会話入門』はコメニウスの“Januae Latinitatis Vestibulum”を訳したもので、『新スラブ・日本語辞典』はボルカルポフの“Лексикон трехязычный, сиречь речений славенских, еллиногреческих и латинских сокровище”(『三カ国辞典』)、『世界図絵』はコメニウスの“Orbis Pictus”を夫々訳したロシア語である。

ボルカルポフ辞典の見出し語をそのまま引用したり、コメニウスの著作をロシア語に翻訳(逐語訳に近いが、ロシアの事情にあわせた例文の増補・原典の一文を分割するなどの異同がある)したりするのであるから、ロシア語部分に差異が生じたり他の資料のロシア語と異なるのも当然の結果であろう。つまりロシア語部分が書物によって微妙に違う

という現象は、ロシア資料の典拠となった著作が異なっていたためである。とすればロシア語部分の微妙な異なりによって、「日本人が書いた」という帰結に繋ぐ事は出来ないのではないか。

一方、翻訳の具体的様相までも想像し、音写に日本人が関係したとするのが田尻英三(1981)である。

田尻は、「болё^vзнь се(д)рца(心臓病)」というロシア語に、「§ 07-R, ми[^]цъ-отошь(ミツオトシ)」(みぞおち)という日本語が当てられている事を根拠に、「ボグダーノフが心臓のあたりに手をあてて、ゴンザに対応する日本語を尋ねた」結果、生じた訳だと推定する。

更に次のように「ファラノ トカトント(満腹の)という意味不明の標出語がある。これはファラノフトカトントならば訳語とも一致するので、恐らくフという語頭の無声化した音節を聞き落したためにおこった例であろう。つまりボグダーノフは標出の日本語形の表記にも関わっていた可能性がある」と推定する。

前者は日本語訳が現場指示的に行なわれた根拠でもある。しかし、これについては駒走昭二(1995)に反論がある。「心臓(病)」という概念或いはこれを邦訳するための語彙を11歳で日本を離れた少年が有していたかというのである。付言すれば「心臓(病)」に相当する語彙そのものが、一八世紀初頭の薩隅方言に存在していたかである。

後者の例が事実ならば確かにボグダーノフが日本語の音写に関わっていた可能性が生ずるが、当該例は村山(1985)の転写ミスなので、これに依った論には問題がある。但し用例を広げれば、確かに次のように聞き落しの可能性を持つものもある。狭母音を持つ語末(形態素末)音節の内破音化という想定される音環境が共通するからである。

Бла-N, варкакосу[^]ръ(悪かこ_二する/悪かこ(と)する)
 Бра-N, кюдета[^]та[^]котъ(兄弟た_二こと/兄弟た_二(く)こと)
 Бу-N, баканко[^]суръ(馬鹿んこ_二する/馬鹿のこ(と)する)
 (『新スラブ・日本語辞典』)

次にロシア人音写説を直接唱えたものではないが、その含みを持つものとして村山編(1985)がある。ここでは『新スラブ・日本語辞典』について、「ポリカルポフ辞典を写すさいに、日本人のおかしがちな誤り(特に流音лとрの混同)が時折見られること、また当時のペテルブルグのじっさいの発音に影響された語の写し方をしているところがあることを考慮すれば、スラブ語・ロシア語の部をボグダーノフ自身が書いたとはどうも考えられない。ボグダーノフの提供した材料もゴンザが書きうつしたと見られる」という。

лとрの混同、ペテルブルグ方言への依拠の二つの点からゴンザ自身による筆録を提唱するが、後者についてアルパートフ(1987)に「ロシア語の立場(ロシア人が書き写したという立場……江口注)から十分に説明可能である」という反論があり、私もペテルブルグ方言への依拠はゴンザ作成説を支持する根拠とはならないと思う。正書法が確立されていない一八世紀初頭以前に、ロシア人自身方言形で表記することが行なわれたからである。

また前者について、これはポリカルポフの『三カ国語辞典』からロシア語の見出し語

(4)

を引用する際に生じたものであり、日本語部分を日本人自身が音写したことにはならない。日本語部分の語順の変更や敬語表現への改訂に日本人の手が加わっているのは事実であるが(江口1995),いま問題としているのは日本語を誰が音写したかという点である。

緻密な語形表記に対して日本語訳があまりに稚拙であるという理由から、日本人音写説が主張される場合もある。蓋然性の高い推定ながら、日本語訳について、実はこれと真っ向から対立する評価もないわけではない。井桁貞義(1986)の「『新スラブ・日本語辞典』の日本版を準備しながら、私たちはその規模の大きさ、訳語的的確なことに驚きつけていた」という言である。

つまり原拠とこれを訳したロシア語とのずれ・このロシア語と更にこれを訳した日本語とのずれ・日本人informantの語彙力の問題・こうした問題を含んだ日本語訳への我々の主観的評価などが関わる以上、日本語訳から音写者を推定する方法は、あくまで想像の域を脱しえないのではないか。ロシア語に通ずる研究者は日本人音写説を唱え、日本語を専門とする研究者はロシア人音写説を唱える傾向が見られるのも、こうした主観的評価と無関係ではなかろう。もっと積極的な証拠があればと望まれる所以である。

ロシア資料が緻密な語形表記を採用していることはこれまでも注目されてきた。例えば語学的な訓練を経ない日本人には到底気付くことの出来ない現象、即ち促音の逆行同化(田尻英三1981,なお後述 §3.2参照)・母音の無声化(江口1992)などを反映している点である。この点自体、異言語を習得した日本人が自国語を反省的に観察することが可能になったためこのような表記が行なえた、母音の無声化などを反映していることは日本人音写説への直接の根拠とはならないという反論が成り立ちうるし、事実その意見がある(駒走1995)。

しかしそうであればこそ更に追究されるべきは、母音の無声化を反映しながら、逆に例えばキ・ク(或いはヒトフ)に母音の無声化が生じた場合にこの対を区別しない例が多く見られるという現象ではないか。

【キ・クの対】

519-N, ю^ˆ кта^ˆ та (良う食たとは)

§02-R, кта[`], ка[`] же (北風)

Ве-N, кцу (きつう/用例多) ~ [参考: Ош-N, кьцу (きつう/用例少)]

【ヒ・フの対】

§02-R, фка^ˆ гё (日陰)

§21-R, фкя^ˆ къ (飛脚)

Воз-N, фка^ˆ йръ (光る)

Бор-N, фцу^ˆ жь (羊)

つまり普通の日本人には気付きにくい母音の無声化などの音声的現象までも表記し分けながら、逆に日本人ならば当然書き分ける筈のキとク(或いはヒトフ)の音韻的な対立を無声化した場合にだけ書き分けていないということになる。日本人が自分の言語を十分に観察してこのような表記が行なったとすると、無声化しないキと無声化したキは区

別したが、キとクの区別を無声化が生じている場合だけ行なわなかったという極めて不自然な想定をしなければならない。

こうした表記の不均衡が生ずる原因は、表記者が母音の無声化には敏感ながら、無声化したキ・クなど特定の対(キとク, ヒとフ)を表記し分けることに十分な手持ちの駒がなかった、或いは無声化したキ・無声化しないキの区別の価値と、無声化したキ・無声化したクの区別の価値に、価値としての軽重を与えることが出来ない、そういう人物であったことを決定的に物語っていないか。こうしてロシア人が音写したと考えざるを得ないのであるなからうか。

なお更にロシア人音写説を支える外的根拠を追加しておこう。村山(1965)には南部漂流民(青森県下北郡佐井村)の方言資料について紹介し、「レキシコン」及び「会話篇」の写真版を掲載する。これはアンドレイ・タターリノフの手になる事が判明しており、ロシア人が日本語を音写するに際してどのような工夫をしたかが明瞭にわかる(この資料については後にも触れる)。

【レキシコン】

母音の無声化

ф а ш м е д е …… はしめて
 ф а ш м е м а с ь …… はしめます
 т а з н е м а ш е н ь …… たつねません
 а р ь г а с ш а р н а …… ありがしやるな

語末狭母音の脱落

б а д а г у ш р а н о …… わたくしらの
 к о н а с а ш а р н а …… こなさしやるな
 н е с а ш а р н а …… ねさしやるな

【会話篇】

拗音の表記

2, р е г ь , р е г ь ш у …… れきれきしやう
 5, к о н о д а ш у …… このたしやう
 11, с а б е р ь м а ш ѿ …… さへりましやう

ここに見られる音写の方法、母音の無声化・母音の脱落・促音撥音の逆行同化(後掲)の反映は、著しく類似すると言って良いのではないか。やはり聞いた日本語をロシア人がロシア文字に写したと考えざるをえないのである。

§ 3 イクタンマナ イゴク

§ 3.1 助詞「は」による形態交替

『日本語会話入門』に次のような例文がある。

(6)

111, жи́во-т́ная дви́жится
111-N, и́ктаммана и́го-к

科学アカデミー本で「и́ктаммана」のうしろから三番目の文字が a か o か判別がしにくいが、他の o と比較すればここは明らかに円が大きく、かつ右側にかすかに縦線が読み取れるのでここは a で読むべきであろう。

「жи́во-т́ное」が主格として用いられており、「и́ктаммана」という文字列の末尾拍「на」は、丁度「012-N, ту́ка, ми́рмона(遠か、見るもな)」が「見るものは」から生じた形式であると同様、オ母音を語末に有する語に助詞「は」が接続して生じた交替形であろう(「見るもん+は」ならば「見るもんな」)。

先行語彙の語末母音がイ・エの場合には、これらの前舌性が交替する主母音に波及するため助詞「は」は ja へ交替し、ア・ウ・オの場合にはこれらの非前舌性は助詞「は」の交替形 a へ波及せず、飲み込まれた姿を呈するからである(江口1991)。この際、拍数を保存するために長音化した可能性があるが、この点は分からない。

§ 3. 2 母音の無声化と促音表記

一八世紀初頭薩隅方言では、少なくともアクセント核がなくかつ無声子音を有する拍に挟まれた狭母音には、無声化拍が連続しない範囲において、無声化が生ずる(江口1992)。こうした音環境にあるものを対応する日本語とともに以下に示す(к с ш т ч ц ф п の組み合わせ)。

【母音の無声化に対応するもの】

к с / к т / к ч / к ц / с к / с ч / ш к / ш с / ш т / ш ч
ш ц / ч к / ц к / ц т / ф к / ф с / ф т / ф ц / п с / п т

用例

к с	040-N, к са̀ (草)
к т	519-N, ю́ к та́ та (良う食うたとは)
к ч	315-N, шу́ бакче (シューバ着て)
к ц	052-N, к цы́ ка (きついか)
с к	序-N, ска́ ю (好かゆ)
с ч	541-N, с че́ нь (捨てぬ)
ш к	014-N, мишке́ ка (短いか)
ш т	032-N, фа́ шта (柱)
ш ч	序-N, омо́ штушчь (面白うして)
ш ц	309-N, ш готшце (仕事して)
ч к	013-N, ч кѐ (近い)
ц к	序-N, ки́ воцкё̀ (気をつけ)
ц т	493-N, ц томе́ я́ рь (つとめやる)

фк	018-N, фка́ка (深か)
фс	225-N, фса́г (塞ぐ)
фт	004-N, фто̀ (人)
фц	065-N, фцу́жа (羊は)
пс	110-N, киноцу́пса (木のつぶさ)
пт	207-N, нѣ́пто̀ва (ねぶとは)

【促音に対応するもの】

кк/шш/тт/чч/цц/пп

用例

кк	178-N, до́кка̀ра (どっから)
сс	§ 06-R, иссу́нбо̀ (一寸坊)
шш	545-N, каку́шша́й (かくっしやい)
тт	序-N, ко́натта́чwo (こなったちを)
чч	098-N, вту́на́ччъ (太うなつて)
цц	336-N, ми́ццъ (みつつ)
пп	348-N, га́ва́ппа (がわっば)

【外国語を表記したもの】

ст

用例

ст	337-N, евлі́стьга
----	-------------------

促音は同じ子音文字を重ねて表記される。ここから一八世紀初頭薩隅方言の促音の音価は閉鎖の持続という共通項を持つだけで固有の音価を持たず、現代語のように後続音に同化されていたとみられる。

またウ段の無声化・イ段の無声化の書き分けは、一つに子音文字の区別によっていることが分かる。

【シの無声化の場合】……шを利用

【子の無声化の場合】……чを利用

【ツの無声化の場合】……цを利用

シの無声化にшを利用するので、結果的にスの無声化にсを用いてもшとの混乱は生じない。

次に母音の無声化を硬音符号・軟音符号によって表わす場合がままある。つまり子音に軟音符号を付け加えることによってイの音色の備った子音とし、その結果として無声化した母音の響きを子音に担わせるのである。

§ 36-R, икьта́тонть (生きたのと)

(『露日語彙集』)

(8)

また子音に硬音符号を付け加えることによって子音にウの音色を添え、無声化したウ母音の響きを子音に担わせる場合もある。この方法が用いられるのは、後続音がラ行音の場合後続音が単独(半)母音の場合である。

【後続音がラ行音の場合】

258-N, ф у ´ к ъ р е (袋に)

412-N, ф у ´ к ъ р е ѡ а (袋には)

415-N, ма ´ к ъ р а (枕)

(『日本語会話入門』)

§ 06-R, е ѡ б у ´ к ъ — р о (餌袋)

§ 07-R, е ´ к ъ р о т а с а т а (酔い食ろうた沙汰)

§ 07-R, м е ´ к ъ р а (盲)

§ 40-R, и т а ´ ц ъ — р а (いたつら)

(『露日語彙集』)

037-Y-f, м е ´ к ъ р а м ъ (盲も)

048-Y-f, е к ъ р а в а т т а (酔食らわった)

(『友好会話手本集』)

【後続音が単独母音の場合】

576-N, с ъ к н а к а ´ я (少なかや)

024-N, ц ъ е ` (杖)

182-N, в а ´ с ъ е ч е (忘れて)

210-N, ч к а р а н ц ъ ю ^ к а ф т а (力の強か人は)

217-N, к а ´ ц ъ ю р ъ (飢つゆる)

341-N, ф т о ´ ц ъ ю ^ н ъ (一つ様に)

383-N, т а т а к а е ´ н ъ, ц ъ е ´ д ж а (杖では)

566-N, к а ´ ц ъ е ч ъ (飢つれて)

(『日本語会話入門』)

§ 03-R, б а ´ н ц ъ к е ˇ (ばんつけ)

§ 08-R, ф ю ^ р о г а ц ъ е (ふよろがつえ)

§ 10-R, н е ´ ц ъ — у ´ м ъ (鼠)

§ 18-R, ц ъ — е ` (杖)

(『露日語彙集』)

語中の硬音符号はス・ツに用いられ、後に単独母音がくる場合が多い。子音に口蓋化の音色をつけくわえる用法と、後続の単独母音と切り離して発音することを示す用法とが共存していたとみられる。当時、子音字とя・е・юなどの母音字との間にこの字が書かれているときは、子音字と母音字を分離して発音するからである。これは例えば「це」と表記すると「ツエ」と誤読される虞れがあった事を物語っている。

ちはその前置詞の後に用いられ、このことによって子音文字に終る前置詞は、後続する母音文字から分離される。この結果、そのような複合語の発音に一定の便利さを与える
(グレーニング『ロシア文法』)

つまりロシア人表記者にとって、シ・ス・チ・ツの無声化を表記するうえで、手持ちの駒(文字種類)が一對一(シ^ハ・ス^ハ・チ^ハ・ツ^ハ)で十分であるうえに、単独母音やラ行音が後接する場合に硬音符号を用いる事が出来るなど、恵まれた条件下にあった。

ところが、キ・クやヒ・フの無声化を表記する文字種類は必ずしも十分ではなく(無声化したキ・クともにк, 無声化したヒ・フともにф), かつ硬音符号には後続母音字と切り離して発音するという用法があったために、母音の無声化を表わすためだけにこの符号を専用に用いるわけにはいかなかった。

硬音符号と軟音符号は、語末ないし形態素末尾の狭母音の脱落を表記する場合に主に用いられる(硬音符号・軟音符号を用いない場合もある)。

【語末の軟音符号】

- キ……193-N, н а н а т о ´ к ъ (七時)
- ギ……429-N, ф а д а ´ г ъ (肌着)
- シ……051-Y-f, т а м а ш ь (魂)
- チ……序-N, ш и ш о ´ т а ч ь (師匠達)
- ヂ……236-N, н а б е ´ д ж ь (鍋で)
- ニ……007-N, с о ´ г е н ь (そげん)
- ビ……430-N, т а ´ б ь (足袋)
- ミ……020-N, м о м ь (縦)
- リ……030-N, ч к и ´ р ь (ちきり)

【語末の硬音符号】

- ク……115-N, и ш т а ´ т а к ъ (石叩く)
- グ……429-N, ф а д а ´ г ъ (肌着)
- ス……100-N, с а ´ с ъ (さす)
- ツ……045-N, м и ´ ц ъ (三つ)
- ヅ……382-N, м ё ´ ш г е д ж ъ
- ヌ……006-N, м і е ´ н ъ (見えん)
- ブ……112-N, т о ´ б ъ (飛ぶ)
- ム……097-N, к у ´ м ъ (汲む)
- ル……序-N, а р ъ (ある)

つまり両符号は形態素末尾に特に用いるのが主たる用法で、母音の無声化を表わすのは副次的用法である。従ってロシア人がキ・クやヒ・フの無声化を表記するためには、文字種類が不足するうえ、補助符号の制限があったと考えられる。無声化したキ・クやヒ・

(10)

フを区別していない理由には、こうした表記上の限界があったとみるべきであろう。

つまり、「и́кта」の文字列は、二拍目に母音の無声化が生じているとみられ、「519-N, ю́кта́ (良う食たとは)」「§02-R, кта̀, ка̀ же (北風)」と同じ音環境にある。

村山七郎(1965)は「イクタ」と片仮名表記(κのみの拍を全て「ク」表記)するが、実は「イキタ」の無声化したものか「イクタ」の無声化したものか、上述のようなロシア語側の表記上の限界によって一方に決定出来ないのである。村山(1965, 1985)が採用する片仮名化はともに村山自身の音韻論的解釈の結果であり、片仮名転写された日本語は場合によっては実在しない形である可能性を弁えておく必要がある。

従って「и́кта」を一八世紀初頭薩隅方言に引き当てるとすれば、

§36-R, икта́ тонть (生きたとんと) (『露日語彙集』)
024-Y-f, икта (生きた) (『友好会話手本集』)

の如く散発的に出現する軟音符号を用いた例から「イキタ」を候補としておき、キとク(或いはヒとフ)の無声化の区別は表記に反映しない場合があると考えておくのが良いと思う。

§4 一八世紀初頭薩隅方言の撥音

さて、これらに挟まれた部分の「mma」は、ロシア語「живо́тное(動物)」に部分的に対応すると思われる。私はこれに「馬」を同定したいと思う。「イクタマナイゴク」は「生きた馬のは動く」という意味の、薩隅方言話者の発話を記録したのではないか。

この例を含め私の興味を引くのはロシア資料において、マ・バ・ダ音を後に伴い、現在の日本語正書法において「う」文字で表記する語頭ウが、後続の音環境に同化したと推定されるかたちで出現する事である。

【マ音の前のm】

045-N, мма́ ка (うまか)
147-N, мма́ сака (うま酒)
245-N, мма́ нь (馬に)
320-N, мма́ ета (生まれた)
321-N, мма́ ецукя (生まれつきは)

【バ音の前のm】

§25-R, мба̀ (祖母)

【ダ音の前のn】

134-N, нда̀ (我々)

これらはマ・バ・ダ音の前に限られる。一方はつきりとウで発音される場合もあったようで、全てが「мбаー」「mmaー」のようになっているのではない。

050-N, ка́кьно, ума́нта, сы́ка (柿の, 熟まんとは, 酸いか)

従ってマ・バ・ダ音に先行する「う」は、或る場合には母音として[u]で、或る場合には後続音に同化した[n]～[m]で出現する、自由変異音として実現していたと想像される。

後続の音環境に違いはあれ、同様の現象は中世末期の中央日本語でも行なわれており、キリシタン達の注意をひいている(薩隅方言ではマ・バ・ダの前、中世末期中央日本語では少なくともマ・メ・モの前)。

V(う)の綴字が言頭に於いてMa(ま), Me(め), Mo(も)の前に立ってゐるものは、明瞭なVでなく、閉じた口の中で発音してそのまま抑止されるのである。……Ten vma(伝馬)はTemma(テンマ)といふ。

(ロドリゲス『日本大文典』)

つまり少なくとも[honno](本の)や[honna](本間)のような語中のNの条件異音[n][m]について、ロシア人表記者はロシア語の子音結合に存在するnn/mm表記を用いて書き分ける事が可能であり、既述のとおり語頭Uの異音を書き分けていた。そしてこれはロシア語部分でも実行される。

002, вре́менный(仮の)

272, око́нникъ(窓わく職人)

389, граммати́къ(文法学者)

389, грамматическіе(文法の)

(『日本語会話入門』)

このような表記の手段を持ち、日本語の音声的変異を忠実に音写し、mm文字列を實際用いる、この状況にも関わらず、本稿で最も注目したい現象はロシア資料で、語中に出現する撥音を常にnで表記するという事なのである。

カ行の前……069-N, она́нконъ(女ん子ん)

ガ行の前……178-N, не́ранга(寝らんが)

サ行の前……312-N, юдансурна(油断するな)

ザ行の前……332-N, канзу́ркотъ(かんずる事)

タ行の前……269-N, ги́нто, ки́нто(銀と金と)

ダ行の前……序-N, ши́ндокка(辛勞か)

ナ行の前……§06-R, фо́нно(本の)

バ行の前……216-N, чи́нба(ちんば)

(12)

マ行の前……105-N, ше́ н м о т о (せんもと)

(『日本語会話入門』)

中に後続音に同化しているように見える例があるが、いずれも語源的には「馬」を含む語であり、実際[mma](馬)と発音されたものであろう。

§ 10-R, да́ м ма (駄馬) ← да + м ма

§ 29-R, те м ма (伝馬船) ← те + м ма

(『露日語彙集』)

mm文字列を使う理由が明白なこうした例を除き、もし一八世紀初頭薩隅方言の撥音の音価が現代日本語と同じようなものであるならば、「105-N, ше́ н м о т о (せんもと)」「216-N, чи́ н б а (ちんば)」などの表記にn文字の代りにm文字を用いることが出来た筈である。

しかし事実はそうならないゆえ、一八世紀初頭薩隅方言の語中の撥音が常に舌端的な音価を持ち、現代語のように後続音に同化していなかったと考えられはしないか。憶測を逞しくすれば、現代朝鮮語のように音節末尾の位置を占めていたのではないか。

以上述べた推定を更に裏付ける根拠を挙げよう。先に南部方言資料について言及したが、ここに現われる促音・撥音はともに逆行同化した姿を反映している。

【促音の表記】

до(к)кара кимашта……とから きました(どっから)

бй(к)ко……ひこ(びっこ)

(『レキシコン』)

41, о м о т т е …… <オモツテ> (思つて)

(『会話篇』)

【撥音の表記】

マ・バ行の前

7, о(м)ме……をめ(御目)

14, на м б о д е м о ……なむほても(なんぼでも)

タ・ダ行の前

11, на н д ё м о ……なんでも(何でも)

(『会話篇』)

こうした例と比較しても、一八世紀初頭の薩隅方言において、促音は逆行同化し撥音は舌端的音価を持っていたと考えざるをえないように思う。

更に一八世紀初頭薩隅方言にナ行連声がみられるのは、撥音が舌端性を有していたからではなかろうか。

031-N, маркамона (丸かもんは)

120-N, ямайна (山犬は)

(『日本語会話入門』)

以上の薩隅方言の状態は、中世末期の中央日本語に想像される撥音と大きく隔たっている。中世末期の中央日本語では語中にあるのは促音・撥音ともに後続音に逆行同化するからである。

NがB, M, Pの前に来る時は、如何なる場合にも拉丁語に於けると同じく、Mと書きそのやうに発音される。例えば, Xemban(千万), mamman(漫々), quimpen(近辺)。

At, et, it, ot, ut, 及び数詞のIchi(一)に, C, Ch, F, Q, S, T, Xの字が続く場合に, 上述のT及びChiは, Cc, Cch, Pp, Cq, Ss, Tt, Xxの字に変化するのである。例へば, Beccacu(別各), yecqui(悦喜), tappai(答拜), mecquiacu(滅却)……(以下, 略)……

(ロドリゲス『日本大文典』)

§ 5 撥音の音価と逆行同化

最も問題となる点は、促音と撥音でこのような違いが何故生じたかという点であろう。

その理由として先ず単語レベルでの促音と撥音の出現位置の違いが挙げられる。一八世紀初頭薩隅方言において、促音は語中にのみ用いられ常に後続音と接している。促音の存在に対して後続音は必須の条件なのである。これに対し撥音は語尾に可能であり、後続音は必須の条件ではない(I)。

(I) §08-R, кумонъ (食うもん<食うもの)

こうして撥音は語尾に可能であるが、語中でも独立性の高い形態素末には同様の現象がある(II)。これらは元々鼻音を持つ語尾(ナ・マ行)から交替して生ずる。付属語レベルでの撥音も同様である(III)。そして助詞「の」「に」の撥音化は前接音のタイプと密接に関係する(江口1989・1991)。

(II) 182-N, нанджемъ (何でも)

§06-R, бенсашъ, ибъ (紅指し指)

(III) 007-N, согень (そげん<そがいに)

313-N, фтонкота (人ん事は<人の事は)

§03-R, нанка (なんか<七日)

語中の場合、漢字形態素末尾(IV)や擬態(声)語出自(或いは強調化形式)(V)の、元々撥

(14)

音を有していたと考えられる部分に出現する。

(IV) §03-R, с а ´ н н ё н ъ (三年)

(V) 388-N, б у ´ н м а в а ш д ж а (ぶんまわしでは)

以上を総合するに、鼻音子音+母音で構成された拍が鼻音性を一拍分だけ残して生成するのが撥音化であり、本来的な撥音とともに後続音と関係のない自律的単位であるといえるのではなからうか。

一方、現代日本語と違い、促音は後続音が有声音であっても出現する(VI)。後続音が濁音であっても母音の無声化が生ずる事と平行する(江口1992)。

(VI) §26-R, ш а ´ г г и н ъ (借金)

195-N, ф о ´ г г а р а н ъ (欲っがらん)

かつ促音は交替するに際して、交替前の音の種類を厳密には問わない。濁音でも構わないのである。これは、母音の無声化が形態素末尾に一致した時(VII)、或いは狭母音の脱落が生じた形態素末尾に更に他の語が接続する時(VIII)、形態素と形態素の接点に同音が連続する時(IX)である。高山知明(1995)のいう一種の境界表示の役割を担っているらしい。

(VII) 545-N, к а к у ш ш а ´ й (かくっしやい<隠し+やい)

(VIII) 414-N, н ё ´ д о г г а (ねどっが<寝床+が)

(IX) 序-N, к о н а т т а ч в о (こなたたちを<こなた+達を)

つまり一八世紀初頭薩隅方言において、母音の無声化・形態素末尾・形態素接点の同音連続という下地に、形態素境界という条件が整えば交替前の音とは無関係に促音化するのである。そして境界の成立には後続形態素が必須条件である。

(II)のように撥音が結果的に形態素末尾に位置して、境界に位置する場合はある。しかしこれは必須の条件ではない。そのうえ元々鼻音子音+母音という構成の拍であったものが鼻音性だけを残して交替するのが撥音化であり、後続形態素とは無関係に存在しうるといえる。助詞「の」「に」の撥音化のように、逆に撥音は前接音と関係する場合もある。

一八世紀初頭薩隅方言において、こうした促音と撥音の出現位置の相違・出現の機能的意味の相違・出現の音条件の相違が、促音は逆行同化するが撥音は逆行同化していないという現象を支えているのではないか。恐らく中央日本語では、撥音化の音的条件が前接音と関係せず撥音化という現象自体希薄であったために、これが逆行同化への障害にならなかったと考えられる。(2)

注

(1)

このように実見しなければ得られない情報を含んでいる点、八杉はロシア滞在中にこれらの資料を見たか、実見した人物から情報を得たのではなからうか。

何の注釈も加えられていないため、どのような手段でこれらを知ったのか、そもそも何故一八世紀のロシアにおける東洋語研究の事実注目しえたのか不明である。各種の八杉貞利の年譜によれば、1901(明治34年11月)に東京を出立、ロシアに留学、1904年に日露開戦の勃発に伴い帰朝する。八杉貞利(1939)掲載略年譜によれば、ロシアにおいて「ペテルブルグ大学の Kultne 教授に主たる指導を受けた」とされるが、Kultne(Б о д у э н . д е . К у р т е н э)から一八世紀のロシアにおける東洋語研究の事実について教示を受けたのだろうか。むしろ奇しくも、当時ペテルブルグ大学にヴェ・バルトリド(B . Б а р т о л ь д)がいたことに注目すべきではなからうか。

彼は1901年よりペテルブルグ大学の教授として赴任しており、東洋古文書通として有名であった。更にロシアでどのように東洋語の研究が行なわれていたかを専門的に扱ったバルトリド(1911)が刊行される。

これには、①(但し、1734年にペテルブルグへ送還)・②・⑧(但し、二人とのみある)・⑨(但し年棒については言及がない)・⑩・⑪(但し『露日語彙集』『日本語会話入門』『簡略日本文法』『世界図絵』のみ)・⑫・⑬についての言及がある。但し八杉貞利の論文はゴンザの足跡だけを述べたものではない。部分的には、バルトリドの著作以上の内容が書かれている。バルトリドの研究から何等かの示唆を得て、当該テーマに着目・発展させたのだろうか。

ちなみに堀竹雄(1918)はオグロ布林(1891)の「ロシアに於ける最初の日本人」とノワコフスキ氏の「日本とロシア」に引用されるクラシュンニコフ著「カムチアトカ地方紀事」を訳出したものである。

(2)

迫野虔徳(1987a・b)に促音・撥音の音韻的独立に地方差があったとの指摘がある。本稿で指摘した促音・撥音の音価実現の相違が、促音・撥音の音韻的独立とどのように関わるのか、或いは関わないのか、尚良く考えてみたい。

参 考 文 献

- ・井桁貞義(1986), ポリカルポフとゴンザ・もう一つの接点—— 項目別ロシア語辞典の歴史をめぐって——, 『窓』57
- ・江口泰生(1989), 形態音韻論的観点からみた一八世紀初頭の薩隅方言—— 助詞「の」の撥音化について——, 『文献探究』23
- ・江口泰生(1991), 外国資料よりみた一八世紀初頭の薩隅方言—— 助詞の融合について——, 『辞書・外国資料による日本語研究』所収, 和泉書院
- ・江口泰生(1992), 母音の無声化と清濁, 『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文社会科学編』43
- ・江口泰生(1995), 「外国資料」としてのロシア資料, 『岡山大学文学部紀要』24,
- ・亀井孝(1992), 梅咲きぬ どれがむめやら うめじゃやら, 『亀井孝論文集6 言語 諸言

(16)

語 倭族語』

- ・駒走昭二(1995),『露日単語集』の日本語学的研究,名古屋大学修士論文(未公刊)
- ・崎村弘文(1986),連声小考,『文献探究』18
- ・迫野虔徳(1987a),促音・撥音の表記の動揺 — 『天正狂言本』の場合 — ,『文学研究』84
- ・迫野虔徳(1987b),中世的撥音,『国語国文』56-7
- ・迫野虔徳(1991),『新スラブ・日本語辞典』の「オ」の表記,『辞書・外国語資料による日本語研究』所収,和泉書院
- ・高野明(1982),日露関係史のあけぼの,『露西亜学事始』,日本エディタースクール出版部
- ・高山知明(1995),促音による複合と卓立,『国語学』182
- ・堀竹雄(1918),元禄享保年間ロシアに於ける日本人,『史学雑誌』19-12
- ・村山七郎(1964),薩摩漂流民ゴンザ(権左)の事蹟,『日本歴史』192-5
- ・村山七郎(1965),『漂流民の言語』,吉川弘文館
- ・村山七郎(1968),日露接触初期の文献学的研究の序説(上)(中)(下),『共産圏問題』12巻4~6号
- ・村山七郎編(1985),『新スラブ日本語辞典』,ナウカ書店
- ・八杉貞利(1909a),十八世紀に於る露西亜の東洋語研究,『東洋時報』124
- ・八杉貞利(1909b),十八世紀に於ける露西亜の東洋語研究,『東洋時報』127
- ・八杉貞利(1939),八杉先生還暦記念論文集『ロシア文化の研究』,岩波書店
- ・V.M.アルパートフ(1987),輿水則子訳:『新スラブ・日本語辞典』の書評,『窓』61
- ・MICHAEL-GROENING(1750),『российская грамматика』(山口巖1991『ロシア中世文法史』による。名古屋大学出版会)
- ・В.Бартольд(1911),”История изучения Востока в Европе и России”, издание, Ленинград(後,外務省調査部(1937)により翻訳(初版),更に1939年にバルトリド『歐洲殊に露西亜に於ける 東洋研究史』(外務省調査部訳)として改訂・再版,生活社刊)
- ・土井忠生訳『ロドリゲス日本大文典』,三省堂

本稿は科学研究補助金(奨励研究(A):課題番号:07710294)による成果の一部である。鹿児島県立図書館には資料閲覧の御骨折りをいただいた。記して感謝申し上げます。

(岡山大学文学部助教授)